

## 主よ、共に宿りませ

（ルカによる福音書24：28～35、詩編23：1～6）

今朝は、ルカによる福音書24章13節から始まった、新共同訳聖書では、「エマオで現れる」と言う小見出しがついた個所の後半の部分、28節から35節までが説教のテキストになります。主イエスが復活された最初のイースターの午後、エルサレムからエマオに向かう二人の弟子たち、一人はクレオパと言ひ、今一人の名は分かりませんが、彼ら二人に復活のイエスが近づき、知らぬ間に彼らの仲間に加わり、互いに言葉を重ねる内に、エマオに着き、既に、時刻は夕刻を迎えており、二人は、それとは知らずに、更に、先へ進もうとされる復活のイエスを、夜道では何が起こるか分からぬため、その身を案じて、無理に引き止め、自分たちの宿にお泊めしたのです。そこで起こったことが、今日の記事の内容です。この説教の題を、「主よ、共に宿りませ」と致しました。これは讃美歌39番に、この讃美歌は5節までありますが、その全節に亘って、折り返し出て来るフレーズです。この讃美歌は、ルカによる福音書の、この“エマオの道行き”に想を得て、これを人生の道行きに重ね合せ、歌った讃美歌です。夕べの讃美歌に分類されていますから、朝の礼拝では歌うことは殆どないのですが、内容を読めば、別に、朝の礼拝で歌っても何も可笑しくはない讃美歌ですから、今朝は、説教題もこの讃美歌の繰り返し、リフレインの部分から取り、礼拝の中でも、この讃美歌を歌うことに致しました。

恐らくエマオは、彼ら二人が住んでいた田舎町だったのでしょう。だから宿は、彼らいずれかの自宅だったものと想像されます。彼らは、過越の祭をエルサレムで過ごそうと、暫くエルサレムに滞在していたのかも知れません。或いは、イエス一行がエルサレムに登って来ると聞いて、エルサレムで待ち受け、暫く、彼ら一行と行動を共にしていたのかも知れません。彼らは、ナザレのイエスについて、「あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていた」と、21節で言っていますから、ナザレのイエスに対し、人一倍熱い期待を寄せていたのでしょう。ところが、その頼みであったナザレのイエスは、サンヘドリン、つまり、ユダヤ議会の謀略で、十字架に架けられて殺されてしまったのです。そればかりではありません。アリマタヤのヨセフの好意で、折角、手厚く墓に葬られたと言うのに、三日経った今日、その遺体までが墓から消えてなくなっていたと、その朝、墓を訪ねた仲間の婦人たちから聞かされて、彼らは、絶望のどん底に落とされてしまったのです。でも、道々見知らぬ旅人、それが実は、復活されたイエスだったのですが、彼らは、未だそれには気付いていないのですが、なぜか、彼らの心は晴れやかになっていることには、気付き始めていたのです。そして、決定的なことが、ここエマオで起こることになるのです。

そのことをお話しする前に、何故、復活のイエスは尚も先に進もうとしておられたのかと言うことについて、少しお話ししておきたいと思います。元々主イエスはエマオを目指しておられたわけではなく、郷里はガリラヤのナザレなのですから、そこに家があったわけでもないのですから、エマオに留まらなかったのは当然ではあるのですが、それだけではなく、ルカは、このことにもっと深い意味を込めて、語っていることは確かです。ルカによる福音書13章33節に、主イエスの、「わたしは今日も明日も、その次も自分の道を進まねばならない」と言う、お言葉が出て来ます。これは元々、ガリラヤの領主、ヘロデ・アンティパスが、主イエスを捕えて、殺そうとしていると聞かされて、それを伝えてくれ

た者たちに対し、ヘロデには帰って、こう伝えなさい、と託（ことづけ）られた言葉なのですが、主イエスは、御自身が始められた神の国の実現のために、それが完成する日まで、つまり、世の終わりまで、働き続ける、と、そう言われたと受け取って間違いはないのです。十字架は勿論のこと、復活もまだ、その途中なのです。ゆっくりとエマオに留まってなどはおれないのです。復活のイエスは、ただ生きておられる、と言うだけのことではなく、何よりも、神の国が完成するその日まで、働き続けてくださるのです。エマオに留まらず、「なおも先へ行こうとされる様子だった」とは、主イエスの、そんな、前進して止まない姿勢、半ば、はやる思いを暗示する言葉だったのです。

さて、早速夕食が振る舞われました。すると、本当は客であるはずの復活のイエスが、何時の間にやら、その家の主人のような立場に立ち、「パンを取り、讚美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」と言うのです。その光景は、ルカによる福音書9章に出て来る、主イエスが五つのパンと二匹の魚で、男だけで5000人もの人々を満腹にされたと言う、所謂“五千人の給食”の場面、及び、ルカによる福音書22章に出て来た“最後の晩餐”の場面と、そっくり同じです。クレオパも、今一人の弟子も、主イエスの十二弟子ではありませんでしたから、最後の晩餐には同席していません。だとすると、あの五千人の給食の場面にはいたことが推測されます。彼らは、何時の間にか主客が入れ替わり、彼(か)の同伴者が、ホストを務め、パンを取り、讚美の祈りをし、裂いて、渡される、その姿を見て、やっとそれがイエスだと悟るのです。これこそは、初代教会から今日に至るまで、キリスト教会では大切に守られ、「御言葉が正しく語られ、聖餐式が正しく執行される所、そこに教会がある」と、宗教改革者が言ったように、教会が教会として立つ上で、欠かすことのできない聖餐式の原型となったものです。確かに、私たちは聖餐式の際、パンが配られる時、それに先立って、「これは、あなたがたのための“わたしの”体である」と言う式文の言葉を耳にします。ここでは、“わたしの”と、一人称の所有格の代名詞が使われます。聖餐式で司式をするのは、人間である牧師なのですが、本当は、生けるキリストがホストとして、今も、私たちにパンを渡してくださるのです。それは兎も角、クレオパと今一人の弟子は、食卓でホストを務め、“五千人の給食”の際と、全く同じことをされ、あの場面を彷彿とさせる光景を目の当たりにして、この方は、紛れもなく復活のイエスだ、と悟るのです。すると、その途端、「その姿は見えなくなった」と言います。でも、見えなくなっただけで、幻影のように消えてしまったり、どこかへ行ってしまわれたわけではないのです。現に依然として、そこにおられるのですが、復活のイエスは、肉眼ではなく、霊眼でしか捉えられないお方なのだ、と言うことが、ここではっきりと示されただけのことなのです。霊眼で捉えるとは言っても、雲を掴むような、取り留めのない、漠然とした仕方ではなく、聖書の説き証しと、聖餐式を通して、御自身を示される復活のキリストを、私たちは、そこに働く聖霊の導きに与かって、信仰をもって捉え、まるで見えないう方を見ているようにして、親しく霊的に交わるのです。

クレオパと今一人の弟子は、今の今まで、単なる一人の見知らぬ旅人だと思っていた人物が、実は、復活のイエスだったのだと悟った時、すぐさま、ここに来るまでの道中のことを思い出し、「(そう言えば)道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(32節)と、互いに語り合ったと言います。復活のイエスから、直々に聖書の説き明かしを受けた時、心が燃えたことを、彼らは、この時になってやっと思い出したのです。確かに、あの時、心は既に燃えていたのです。がしかし、その時には気づかなかったのです。ずっと時間が経って、やっと今になって、そのことに気付いた、と言うわけなのです。と言うことは、聖書の言葉に触れて、心が熱

くされ始めても、直には気付かず、本当にそれに気づくには、時間がかかる、と言うことなのです。聖書の信仰は、パッと燃えて、パッと消える、瞬間的、一時的なものではなく、静かではあっても、生涯燃え続ける、息の長いものなのです。人間の精神活動は、知情意の三つの領域で起こると考えられています。情だけではないのです。情だけ燃えては、信仰は狂信か迷信になりかねません。また、知だけ影響を受けても、信仰は、冷たい、何ら心に響かない、頭でっかちの哲学まがいのものになりかねません。更には、意志だけ強化されても、単なる道徳主義か、悪くすれば、律法主義に陥りかねません。聖書の信仰は、知情意全体に影響を及ぼし、高い知性、強い意志、豊かな感情を生み出してこそ、その本来の姿を現すのです。だから、時間がかかるのです。促成栽培的には行かないのです。クレオパと今一人の弟子が、復活のイエスから直々に、聖書の説き明かしを受けながら、それに気づくのが遅く、結構時間を要したと言う話は、聖書信仰の、その辺りの事情を暗に語っているのです。

復活のイエスから直々に聖書の説き明かしを受け、また、聖餐式の原型となった裂かれたパンを復活のイエスから受けることを通して、ナザレのイエスは確かに復活なさったことを確信した彼(か)の二人は、もうこれ以上その場にじっと留まっていることができず、時を移さず出発して、エルサレムに戻って行きました。行き先は、主イエスの十二弟子、つまり、使徒たちの許です。すると、イスカリオテのユダは脱落して、その仲間から抜けた後ですから、残った11人が、既に、全員一堂に集まっています。「本当に主は復活して、シモンに現れた」と言い合っている所に出くわすのです。それにしても、時を移さずに、エルサレムに戻るとは、余りに無謀過ぎはしないでしょうか。夜道何が起こるか分からないからと、無理矢理、彼らは復活のイエスをエマオに引き止めたのです。でも、そんな記憶など、すっかり彼らの頭からは吹き飛んでいて、今の彼らには何の問題にもならなくなっていたのです。それに彼らは、エルサレムから三里の道を歩き通して、エマオに着いて間がないのです。彼らが疲れているのは、わざわざ言う必要がないほど確かなことなのです。しかし、そのことも、今では彼らの意識から、すっかり吹き飛んでしまっているのです。時刻は、深夜に近づいているのです。辺りは真っ暗闇です。でも、彼らの心は光に満ち、喜びで溢れているのです。エルサレムからエマオまでの道中とは、まるで逆さまです。あの時、太陽は高く昇り、光りは全地に満ちていました。しかし、彼らの心は闇に包まれ、そうした心を反映して、二人は暗い顔をしていたのです。つくづく人間は精神の動物だと思わざるを得ません。心に喜びが宿り、光に包まれると、暗闇の世界も、光の世界に変わるのです。たとい、暗闇の世界はそのまま暗闇の世界であり続けても、それは、最早何の障害にもならないのです。それもこれも、すべては主イエス・キリストの復活がもたらしたもので、根源はここにあったのです。ヨハネによる福音書冒頭の言葉、主イエス・キリストのことを“言(ことば)”と語り表した最後の部分、1章の4節、5節を、私たちが以前用いていた口語訳聖書では、このように訳していました。「この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」と。肉となった神の言葉、即ち、主イエス・キリストが、本格的に、人の光をなられたのは、復活後のことでした。十字架と復活を通して、人間に真の命をもたらしてくださったのですが、その光は、闇の中に輝いていて、その闇がどんなに深まろうと、この光を覆い尽くすことはできず、最終的に光は、闇を飲み込んでしまい、闇に勝利して、世界全体を光で包み、光の世界にされる、と言うのです。エマオで起こったことは、特にも、クレオパと今一人の弟子の身に起こったことは、それを先取りし、また、印象深く、それを証明して見せてくれている、と、そうやってよいのではないのでしょうか。

ところで、エルサレムの11弟子の許には、クレオパと今一人の弟子が告げる前に、既に、イエス復活のニュースは届いていて、「本当に主は復活して、シモンに現れた」と、互いに言い交していた、と言います。これは、世界最初の復活証言と言われるコリントの信徒への手紙一15章4節以下の言葉と一致します。そこにはこう述べられています。「キリストが、・・・葬られ、・・・三日目に復活したこと、ケファに現れ、云々」と。主イエス・キリストの復活の顕現は、先ず、ケファの身に起こった、と言っているのです。ケファとはシモンのこと、つまり、ペトロのことなのです。私たちは何となく、復活のイエスの顕現は、十字架から三日目の早朝、主イエスの墓を訪ねた彼（か）の婦人たちが最初だったと、思い込んでいるのですが、彼女たちは空の墓は見たものの、復活の事実は、天使に告げられただけで、実際には見てはいないのです。では、クレオパと今一人の弟子が最初かと言うと、彼らが使徒たちに伝える前に、既に、ケファには現れていた、と言うのですから、ケファが最初と言う、パウロが伝えている復活証言は、ルカによっても証明されている、と言うことができるのです。ルカはパウロの弟子でしたから、当然と言えば当然なのですが。

主イエスの復活は、クレオパと今一人の弟子を突き動かしたばかりか、ペトロ以下11名の弟子らをも動かし、彼らを再結集させました。彼らは、知らぬ間に、主イエス・キリストの復活の証人としての群を形成していたのです。これぞ、教会の本来の姿で、教会は“キリストの体”と定義されますが、言ってみれば、十字架に死んで復活された主イエス・キリストが、地上に残された体であって、この体を通して、復活のキリストは今も働かれ、御自身が生きておられ、御業を今も継続され、必ずや終わりの日に、御自身が始められた神の国を実現されることを、世に向かって示し続けておられるのです。そのために招かれ、この体の肢体とされているのが、外ならない、私たちキリスト者なのです。

今日の記事を学んだ今、この自覚に今一度目覚め、復活の主の御期待に応える思いを新たに致したいと思えます。

(三輪恭嗣)